第２回青森駅を中心としたまちづくり有識者会議　会議概要

１．**開催日時**　　平成２７年１１月１１日（水）１０：３０～１２：２５

２．**開催場所**　　ウエディングプラザアラスカ　４階　「ダイヤモンド」

３．**出席者**

【委　員】

赤石 佳昭、伊香 佳子、石田 賢哉、大津 千鶴子、北原 啓司（座長）、木村 幸雄、
齋藤 道法、鈴木 武彦（代理：山田 大輔）、千葉 功己、珍田 裕之、西 秀記、
森内 忠良（代理：野月 ひさ子）、立木 祥一郎　以上１３名（１名欠席）

【事務局】

都市整備部長（金子 牧子）、総務部長（代理：庁舎建設課長 小野 正貴）
経済部長（代理：経済部理事次長事務取扱 増田 一）、都市整備部理事（舘田 一弥）、
都市整備部次長（八戸 認、舘山 新）、
都市整備部都市政策課長（小倉 信三）、都市政策課副参事（佐々木 浩文）、
都市政策課主幹（武田 泰孝、東條 英哲）
都市政策課主査（京谷 智）、都市政策課技師（小澤 宏央）

４．**次第**

１．開　　会
２．あいさつ（都市整備部長）
３．議　　事
　（１）青森駅周辺整備推進事業の今後の方向性（市の判断）について
　（２）にぎわいづくりの取組事例の紹介と周辺への波及方策について
４．閉　　会

４．**会議概要**

◆**「青森駅を中心としたまちづくり有識者会議実施要綱」第３条第３項の規定により、北原座長が会議議事を進行。**

北原座長	１回目が（今年の）１月であったので、今日は１１月１１日ということで、やや間が空いてしまった。改めてしっかりスタートするという「１１１１」ポッキーの日であるが、そこからスタートさせていただく。 今、（都市整備部長からの挨拶で）あったようにこの間（かん）、お金の問題もあり、いろいろ困難な状況にあることから、事業としてもその先が見えないというようなこと、そんなこともあり我々の会議も少し休憩する時間があったと思うが、先ほど、（都市整備）部長からもお話があったよ

	うに、そういう時だからこそちゃんとした方向性を我々は考えなきゃいけない。同時に今設計中の青森市役所の新庁舎という動きもある。そういう点も含めて私達みんなで駅を中心としたまち、まちの暮らしみたいなものをしっかり考えていかないと、若干遅れがあったので、しっかり議論するという気もする。前向きに考えたいと思うので皆様からの協力をよろしくお願いする。 まず、設計前の協議ということから、駅の周辺を含めたメニューの話が中心となっていると思う。当然、この駅の周辺には、まちだけではなく、今造っている市役所を中心とした「まちの在り方」みたいなものが関係している。今回は、有識者会議というか、基本的に青森市のまちの中を自分たちの場所にしたいと思う人たち、そしてそれに関わる役割を持って担う事業者の方々。そういう方々と一緒になって知恵を集めながら、将来の駅、中心市街地、そして市役所庁舎周辺地域をうまく繋げながら、まち中を育てていく人たちを、今回こういう機会の会議の結果として作っていきたいというのが、私が座長として考えていることである。「何を作ればいいか。」ではなく、「どういうことがこの街はできて、どんなことをしなくてはいけないのか。」ということをこの会議で明らかにすることができれば、目標がはっきりするので、あるいは、その目標に関して、それぞれの立場で、「今、何をすべきか。」「何ができるのか。」ということを確認していただきたいと思う。 では、次第に従い、今日は（１）として青森駅周辺整備推進事業の今後の方向性（市の判断）を。 そして（２）では、にぎわいづくりの取組事例の紹介と周辺への波及方策ということで、先ほど御紹介のあった立木委員、それから伊香委員に今日はプレゼンテーションしていただきたい。「決して外堀ではなく、そのようなことをやっていくこと自体が、駅を中心としたまちづくりにも本筋の部分である。」ということを皆さんに御理解していただきたいということで、今日はこういった構成になっている。

◆（１）青森駅周辺整備推進事業の今後の方向性（市の判断）について

事務局より資料１に従い説明。

事務局	（資料１　１ページ） 青森駅周辺整備推進業については、総事業費が昨年度末の試算において当初計画である平成２４年８月の８１億７千万円に対し、約１．５倍となったことを受け、財政環境等を様々な視点から総合的に見極め、概ね２年で、事業実施時期を判断し、環境が整い次第、事業に着手したいと考え、４月３０日に今後の方向性案をお示ししたところであるが、去る５月２７日に、青森商工会議所様から「青森駅周辺整備に関する緊急要望書」が提

	出されたこと、また、議会等からも「急いで判断せず、６月の定例会で議論を尽くすべき。」との御意見があったことなどから、その議論及び市民の皆様からの御意見を踏まえ最終的に判断することとした。 （資料１　２ページ） 資料に記載のとおり議員並びに市民の皆様からは、 ・立ち止まるべき ・このまま進めるべき ・アウガの活用も含めた駅周辺整備を考えるべき など、多くの御意見をいただいたところ。 （資料１　３ページ） 市の案を公表後、市からＪＲ東日本盛岡支社様に対し、更なる事業費縮減についての相談をしてきたところ、６月に、「ＪＲ東日本盛岡支社としては、青森駅周辺のまちづくりは重要であると認識しており、事業費縮減について市が検討を行うのであれば、協力させて頂くことは可能である。」「検討を進めるのであれば、２０２０年度までに青森駅のバリアフリー関係の整備を行いたいと考えており、来年度当初の基本協定締結に向け、本年度内に関係者において調整を図ってはどうかと考えている。」とのお話を頂いたところ。 （資料１　４ページ） 市としては、青森駅周辺整備に関する事業費が約１．５倍となり、大きな事業費の縮減は困難と考えていた状況下において、ＪＲ東日本様から「事業費縮減の検討について御協力を頂ける」という御回答をいただいたことは、非常に大きな環境変化であると捉えたところである。 これまで、議会並びに市民の皆様からは、「事業を止めるべき。」、「立ち止まるべき。」、「このまま事業を進めるべき。」といったものを中心にさまざまな御意見をいただいたところであるが、 ・事業費の縮減に努めるべき。 ・まちづくり全般についてきちんと検討すべき。 という考えが多く示されていた。 市の案の公表後にいただいた、様々な御意見、また、ＪＲ東日本様から頂いた「事業費縮減」についてのお話などを踏まえ、熟慮を重ねた結果、まずは事業費縮減に向け、ＪＲ東日本様に協力をお願いし、検討を進めること。 また、これまで「概ね２年で、事業実施時期を判断し、環境が整い次第、事業に着手したい。」としていた市の考えについては、「本年度内に関係者において調整を図りたい。」というＪＲ東日本様のお考えも踏まえ、持続可能な財政運営と有利な財源確保に努めつつ、できるだけ早い時期、概ね

	本年度末での判断を目指し最大限努力すること。 　さらに、今後策定する立地適正化計画と連携し、誘導すべき都市機能の検討を行うほか、これまでの議会並びに市民の皆様からの御意見を踏まえ、青森駅から市役所にかけてのまちづくりについて、関係団体等から御意見を伺うこと。 　これら３点について進めて参りたいと考えたものである。 （資料１　５ページ） 　参考として、ただいま説明しました内容のスケジュールイメージ。 （資料１　６ページ） 　これまでのまちづくりの取組と関連計画をそれぞれ掲載している。 　そして、今回の「市の判断」のうち、「青森駅から市役所にかけてのまちづくりについて、関係団体等から御意見を伺うこと。」については、本会議の中で、行って参りたいと考えたところである。 　本会議は、「青森駅を中心としたまちづくり基本計画」の実現に向け、市が提示するコンセプトやデザインに関する事項、青森駅を中心としたまちづくりへの市民参画に関する事項について意見を頂戴することを目的に設置している会議ではあるが、事務局としては、青森駅から市役所にかけてのまちづくりを考えていき、青森駅周辺のまちづくりが動き出したときに、それらと繋がるような取組について、この会議の中で御意見をいただきたいと考えており、本年度中３回程度開催する予定。 　青森駅周辺整備については第２期中心市街地活性化基本計画の核的事業ということで資料１　８ページにもあるとおり、今日は様々ある中心市街地活性化の取組と関連して、この後、案件の２番目で、「にぎわいづくりの事例紹介」を伊香委員と立木委員に御協力をお願いしているところ。

◆（２）にぎわいづくりの取組事例の紹介と周辺への波及方策について
伊香委員（資料２）及び立木委員（資料３）より説明。

北原座長	この間（かん）の動き、状況について経過説明をしていただき、「改めて今からこういうスタイルで始めたいんだ。」という御説明があった。 　今の説明に関して御質問、あるいは、それを受けて御意見のある方は、その場で手を挙げていただきたいと思うが、いかがか。 　では、まず今の説明に関しては了解し、早速、今日、地域の中でにぎわいをつくり、今進められていることを少しお聞きしながら、その上で私たちの会議でどんなものを参考にすべきか、早速、伊香さんから、にぎわいづくりの取組事例の紹介、について御説明いただきたい。

伊香委員	中心商店街女性部の伊香ですが、同時に新町商店街振興組合の一員でもある。その両方の取組について御説明をさせていただく。 「にぎわいづくりのイベント」というようなお話があったが、新町は「一店逸品運動」というものに２００３年から取り組んでいる。これは、にぎわい作りも兼ねているが、「商店街を活性化するということの本質はどういう意味なのか。」と、「商店街としてきちんと市民から必要とされていなくては活性化の意味がないのではないか。」という部分に、自ら取り組んできたものである。このあたりを中心に、新町商店街の取組のほんの一部を紹介させて頂く。 まずは、合成写真などではなく実際に大変多くの方が新町に集まって楽しんで頂いている写真をお見せしながら、「ＡＯＭＯＲＩ春フェスティバル」について説明する。以前、５月の連休は、さくらまつりの方にほとんどのお客様が行ってしまい、商店街はガラガラの状態であった。そこで、何かにぎわいづくりができないかということで、１０年前に商業者自らが提案し、自らが参加者にもなって作り上げた、よさこいと大型ねぶたを組み合わせた新たな祭りで、現在も参加者・見物客共に大変なにぎわいを呼んでいる。 次の「しんまちふれあい広場」。これもまた大変なにぎわいを博しながら今年で１８年継続して開催している。「ねぶた祭りだけではない新町のにぎわいを作る。」ということで企画し始めたもので、新町通りを歩行者天国にし、あらゆる団体、老若男女、いろんな方々に開放して、取組などの発表の場とし、利用していただいている。 クリスマスの例としては、「じゃんけんサンタ」というイベントで、大人と子どもが混じってたくさんのサンタの姿になって、来街客と楽しむというものを毎年実施している。子供たちに小さいうちから「楽しい地域の商店街が存在する。」という経験をさせてあげないと、将来例えば県外に出た時、どこの出身であっても、思い出す店の形が全国一律の郊外型大型店になってしまう、という危惧のある現状である。したがって、子供たちに地域愛を持って育って貰いたいと、こうした子供を巻き込んだイベントも続けている。 次の写真は、商店街の一本裏手にある、長い歴史を持つ神社と協力して行っているイベントである。商店街なので、特別な宗教色は無いのだが、まち中なのに自然が保たれているという点が大変人気で、商店街の逸品グルメや地産グルメの提供と絡めて、毎年多くの集客がある。 ここまではいわゆる「にぎわいづくりのためのイベント」への取組の一部を御紹介した。 さて現在。買い物をしたり、ぶらっと行く場所は、昔はこうした商店街だけであったため、一か所集中で大変にぎわった。が、今は車社会となり、郊外に大型店が立ち並び、商店街以外に、利用される場所、行く場所が増

	えた。商店街が昔のようににぎわっていない理由の大きな一つには、こうした、行き先の選択肢が格段に増えていることもあげられる。 　だからといって、地域商店街は、そのまま利用されなくなっていっていいのだろうか、本当に私たちの存在はもう必要ないのか。そのあたり、商店街を単なるイベントの場ではなく、商店としてきちんと御利用いただくことを通して、その存在意義を自分たちも見つめ直し、お客さまにも再発見していただくという、商店街活性化の本質を極める取組。これが、新町商店街が今年で１３年継続している「しんまち一店逸品運動」である。 　商店街のそれぞれのお店が、お客様にとって本当に必要とされる店か、または必要とされる店に再びなれるか。その追及のために、各専門店ならではの「お店の逸品」というものを毎年新しく考え抜いて決め、お客様にそれをおすすめしながら様々挑戦し続ける。これを、２００３年から、１３年続けている。 　通りの道だけ綺麗になっても、あるいはそこだけ人が来る「ハコモノ」ができても、まちのお店に買いたいものがあって、まちのお店が来たい所に再びならなくては、本当の意味での商店街活性化にはならない。これが、この逸品運動という取組を続けている新町商店街が考えている事である。 　同時に、もちろんにぎわい作りも必要なので、最初にお伝えしたような様々なイベントも仕掛け続けている。そんな中で、逸品運動の内容そのものをしっかりとお客様に伝えて、わかっていただいて広めていただき、再び各お店のファンになっていただこうと、逸品のお店を私たち商店主自身がガイドになって案内する「逸品お店回りツアー」というものを、１３年間毎年、何度も開催し続けている。大変盛況、大人気で、お客様の要望で実施回数も年々増えている。継続するための工夫として、参加者には食事代などの実費はいただいて有料としているが、お店の逸品や店主とのふれあいを楽しみながら、街に来たいという方が、おかげさまで絶えず、年間何度も実施しているが、変わらず募集に対して一回に２０名以上、時には４０名にも上るという盛況・人気を博している。 　このツアーを通して、各店の逸品という、「もの」のことを一生懸命伝える誠意が、商店街の、人や心が伝わることに繋がっており、改めてまちの存在を思い、見直し、再びお客様になってくださる方が多いというありがたい現状にある。 　そして、この新町商店街の逸品運動の取組は全国でも評判になっており、県外から多く視察の方がいらっしゃる。その際に、「いわゆるお土産品でない、各店の逸品」というものも喜んで買って下さり、「本当にいいものを買えて、うれしい。」とおっしゃるのを聞いて、２０１３年から「しんまち逸品ツアー旅人版」というものも設定した。北海道新幹線開業をきっかけにしているが、それに限らず全国からの方々を対象にしており、実際に必ずしも観光土産でない、地元地域店の逸品や店主の笑顔が大変好評である。

	次の写真は、新町商店街の街路樹である。新町商店街は、もう２０年以上にもわたってまちづくりや活性化に取り組んでいるが、街路樹にも美しい青森の四季という地域性を出そうとひめりんご、まるめろ、ハナカイドウなど寒い地域でも美しい花が咲き、実がなって、歩きながら見て長く楽しめるものをメインに植えている。写真のように、まちにいながらにして、かわいいりんごのつぼみ、満開のりんごの花、真っ赤に実るひめりんごなどがみられ、ツアーなどでもこうした紹介をすると、非常に喜ばれて改めてまちのファンになって帰って行かれるという現状である。 次に、青森市中心商店街女性部は、やはり自分たちにできるまちの活性化を、ということで、新町以外も含めた中心商店街７つで結成して１６年ほどになる。観光客の方から、道や名物、飲食店などいろいろと聞かれることが多い商店街にいるので、１６年前に、何か名物づくりの役に立てばと、青森と言えばりんご、お土産と言えばお菓子、りんごのお菓子と言えばアップルパイということで、アップルパイコンテストなどへの取組を長年続けてきた。 それを通してアップルパイ名人を発掘することができ、そのことを生かして、まちなかでアップルパイ教室や、まち歩きや地元の市場見学と手作りアップルパイ体験を絡めたツアーを提案して、例えば、言葉の通じない外国客船のお客さまにであっても、他ではできない、青森ならではの楽しくおいしい体験を大変喜んでいただいている。 ちなみに、この体験会場としているまちなか工房林檎倶楽部というのは、市の助言をいただきながら、私たち女性部で、まちなかの空き店舗を食イベント関連の拠点として保健所の許可も得て整備したものであり、まちづくりに関心のある高校生が交流カフェを開いたり、主婦の一日シェフイベントなど、様々活用されている。また、この写真の外国人御夫婦は、以前に客船で青森に来られてアップルパイ手作り体験と市場見学ツアーに参加された方で、二年後の新町で偶然再会し、青森が楽しかったからまた来たよ、というう れしく珍しい体験をしたものである。 また、こうした取組を、市の観光部門ともいろいろ連携し、旅行エージェント向けのオリジナルまち歩きモニターツアーなど実施した結果、大変好評価をいただき、この秋からの JTB エースツアーのオプショナルツアーとして「青森まち歩き逸品ツアー＆手作りアップルパイ体験プラン」として正式採用いただき、旅行会社のパンフレットに載せていただいている。現在、来年度も引き続き採用したい、とのオファーをいただいている。 このように、自分たちの足元にあるもの、地域のもともと持つ良さを見つめながら、地元の生活者であるお客様に対し、地元の良い所、商店街のあるべき姿、そういったことを伝え続け、感想をお聞きし、これからの生活に本当に必要な場になろうと取組続けてきたことが、結局は商店街、あ

	るいは商店としての基本を極め、地力をつけることに繋がっており、それはそのまま、地元のみならず県外からのお客さまにも通用し、喜んで頂けている。 　これらは自然に、東北新幹線全線開業時の青森駅周辺での対応の、体制づくりに繋がった。また、そのように、基本を極めれば様々な継続する発展につながる、ということを資料などから読み取ったマスコミの方々が、北陸新幹線開業時や、北海道新幹線開業時の、駅周辺の取組の先進事例として取材に見え、記事にしていただいている。また、しんまちの逸品お店回りツアーは、あの有名な街あるきツアーの代表である「長崎さるく」関係の方からもお褒めの言葉をいただいたものであることも、余談ながら最後に付け加えさせていただく。
北原座長	しばらく前までは、商店街の方々がこんな企画をしているというお話は、いわゆる販売促進とか、セールとかそこら辺の話だったかもしれないが、今のお話を聞くと、決して、爆買いをしてもらうつもりではなく、歩きながら街を散歩して四季を感じる街路樹の話もあり、お仕事をする人だからこそわかる街の楽しみ方みたいなお話であった。 　北陸新幹線金沢駅開業時も、富山駅では歩くことに関してはまだうまく出来ていません。駅だけが一人歩きしようとしています。そういう意味では、青森のことを紹介していることはとても大事な気がする。 　続いて、今日から臨時委員として加わった、立木さんからプレゼンテーションお願いする。
立木委員	**〔青森市での事例：アートでオン！〕** 　伊香さんの行っている非常に素晴らしい事例を拝見して、今日（委員紹介時に）御紹介いただいた「アートでオン！」というアートで音楽のあるまちづくり構想というのを青森市さんの方で策定されており、それに基づいて市民が主体となって、それをどうやって推進していくか、というような検討の委員会があって、その委員をやらせていただいている。まず、青森の街の中でもアートとか音楽に焦点をあてた活動を少し御紹介させていただきたい。 　シンボルマークは、「アートでオン！」と最後こぶしを振り上げるという、これは、ねぶたのグーで作ってある。竹浪さんという素晴らしいねぶた絵師さんに作っていただいた。 　１０月３１日には、劇作家の平田オリザさんをお招きしてフォーラムを開催した。 　このフォーラムは、３回目で、今回はアーツカウンシルという、ちょっと横文字になるが、こういうものを青森で設立したらどうか、というようなことでフォーラムを開催した。このアーツカウンシルというのに沿って、どういう活動なのか、何を目指しているのかということをお伝えした

い。

「アートでオン！」でも、今までフォーラムを３回ほどやっており、その間にパイロット事業としていろいろなイベントを行った。ミチバタ版画、新町商店街とかを中心として、子供たちが作った版画を暖簾のようにして立て下げるプロジェクトとか、今年は新町とアラスカ会館の角の元マクドナルドの建物、ずっと閉まっていたところをお借りし、そこの１階、２階で、現代美術の作家、地元の女性の作家と、それから東京在住の東京芸大の大学院の若井さんらの作品の展示をした。主に、こんな活動をした。

少しわかりにくいが、「アートでオン！」が目指すところ、ロジックモデルというもので示しており、要はこの基本概念というのが創造都市という概念。そっち方面の都市を再生するためにどうするのか。アートとか文化的な事業を複合的に組み合わせることによって、都市を再生するというような、２次産業とかそういう大きな産業で栄えたまちが衰退しているというのは日本だけではないので、世界的な先進国での事象であるが、そういうものを創造的な活動を文化で再生するという、昔はお金があるところは文化をやるという概念であったが、現在は経済を文化が救うというようなそういう理論があり、それに基づいて、ロジックモデルといって、何を達成していくかということを分析したものをイラストで表したものである。

アートでオンのロジックモデルは、

・「アーティストがいて街の中でいろんなイベントをやろう。」というようなことで、「なんとか街を作って行こう。」という気運が盛り上がっていく。
・次に、その中でターミナルになるような拠点を作ったり、空き店舗を再生して、そこを何かの場所にしよう。
・しばらくすると、アーツカウンシルというようなちゃんとした組織を作る。要は、地域のアートを進行していくようなことを、行政は支援するが、民主導で推進していくというようなもので、イギリスが発祥であるが、今、東京でも大阪でも、主要な都市では、アーツカウンシルを（進めており）、国でもアーツカウンシルを作るというような指針が明確に示されているが、青森においては、人口規模が３０万くらいのまちに最適化したような小さな組織としてのアーツカウンシルを目指そうということで、どういうものかということを、今、模索しているような状況である。そうやっていろんなイベントを起こしたりとか、ここにＩＴ企業が参入してきたりということが、クリエイティブな人たちが入ってくる拠点ができるということである。
・最初はアート系だったものが、だんだんＩＴとかもっとクリエイティブな音楽産業とかそういうような、調度、森が最初、荒れ地に草が生

えて松が生えて、次第に針葉樹林になり、クライマックスを迎えるというようなサクセッション理論というのがあるが、都市の再生の道筋というのも、あたかもそういうようなプロセスを設けており、そのための最初の種まきをして、松を植えて行くというような作業があとの部分で非常に重要な使命である。それが最終的に国際的にいろんな交流が起こり、交流人口が増えていくというところまで持って行きたい。

というようなことである。

実際には、今年も「アートでオン！」の構想があり、それと同じくA-Paradise というのも青森市の文化スポーツ振興課を中心として、若い人たちが青森市の市街地でいろいろと活動するイベントであった。

A－FACTORY とかワ・ラッセとか、そこから海だが、ちょうどここがメイン会場となる形で、新町、それから昭和通りを軸として各地、空き店舗などを利用していろんなイベントをやっているというような形である。

夜８時くらいから市役所に若い人が集まり、毎晩のように準備とか打ち合わせを行った。市役所の方も多いので、このように夜な夜なライブをやったりして市役所と思えないような様相を露呈していた。準備作業をするということ。これは、まちにとても大切なことで、結果としていろんなにぎわいのあるイベント、というようなものがあるが、イベントだと結局１日とか２日、あるいは展示とかだと１週間とか２週間、せいぜい大きな展覧会でも１か月とか２か月であるが、この準備というのは、これ２日のイベントに３か月くらいかけていて、ねぶたも一緒で、夜な夜なそうやって街の中に若い人が集まりいろんなことをやる。この準備期間が街を元気にしていくというようなことは、これは忘れてはいけない。市の方はずっとお手伝いをしているので、こういうような拠点がまちの中にあるということはとても重要である。

市の広報あおもり（１０月１日号）でも取り上げてもらっているので、ご覧になっている方も多いかと思うが、ワ・ラッセの広場で、雨が降ったにもかかわらずにぎわった。昼間は子供たちでにぎわい、若い人が（市役所内で）準備していた旗を会場で使用した。

〔弘前市での事例：Ａ to Ｚ〕

弘前は今、現代美術館を作ろうとして、レンガ倉庫を整備しており、そもそもきっかけになる展覧会、北原先生なんかにもいろいろ奉仕していただいたプロジェクトの内容を御紹介する。

２００６年に行われた「ＡｔｏＺ」というイベントは、レンガ倉庫、非常に大きい空間で、ここに５か月間いろんな廃材を運び込んで、それを組み立て、この中を架空の街にするというプロジェクトであり、大変な苦労をして（架空の町を）作った。

５人の大阪から来たプロのクリエイターに、毎日２０人くらいのボラン

	ティアスタッフが手伝いをして組み立てた。それで約５か月間ここで建て込みをやって展覧会場を作った。 　この運営ではいろいろお手伝いをいただいたが、お金は一銭もいただいていない。全部、ボランティアスタッフが手弁当でお金を出して元手にしたり、それから売上収入、あとグッズとカフェの売上でまかなうというシステムである。 　また、収入源を確保するため、地元の六花酒造というお酒屋さんとタイアップをしてできたオリジナル商品のワンカップは、１個当たり４０円、展覧会に入る契約を結んでいるキャラクターを使っており、それが１０万本ほど売れたので４００万程資金調達ができた。それも目的なのだが、パッケージでこれが店頭に飾られることによって、展覧会のＰＲ効果を目指したデザインになっている。 　中三デパートでは、小さいスペースでの展示をしていただき、ワンカップを売っていたが、イトーヨーカドーの地下のスペースにも設け、だんだん評判が良くなり、(イトーヨーカドーの) 1Ｆの一番のスペースでワンカップを売って、これが展覧会を宣伝する状態になった。 　弘前のねぷた祭りでは、我々の展覧会のスタッフたちが自分たちで（ねぷたを)作った。展覧会も作りながらねぷたも作って大変なことであるが、皆さん好きでやっていたようである。 　奈良（美智）さんのキャラクターを「タダで使ってもいいよ。」と奈良さんから許可を得たので、皆さん勝手に（ねぷたを）作って、実行委員会とは関係なく町内の人たちが勝手にこういうの（ねぷた）を作った。ポケモンとか、ドラえもんとかは、著作権料が発生するが、奈良さんのキャラは、タダなので、今なら許されないが、青森県立美術館にある「あおもり犬」というものを大胆にいじって山車を作った。 　こんなような形で、皆さん自由に一銭もお金を使わずに、お祭りを通してＰＲをするというようなことを実現した。青森市においてもスターウォーズねぶたが非常に全国的な話題になったが、そういうものを展覧会で催したという話である。 　東京の青山には、「ＡtoＺカフェ」というのを作り、これは展覧会の宣伝のためにカフェを作ったが、これは未だに展覧会がなくなっても「ＡtoＺカフェ」だけは営業している。 　結果として、最後成功して大きな収益を上げたので、「Ａ to Ｚ Memorial dog」これを製造して弘前市に寄付し、スタッフたちが運用している。 　このレンガ倉庫では２００２年、２００５年、２００６年と３回展覧会を開催し、延べ１万７千人のボランティアスタッフたちが関わった。それからお客様が１６万人。４億円の事業を市からのお金を一銭もいただくこ

となく実現した。ボランティアの皆さんの血と汗と涙と、お金を出資していただいた方で運営した。トータルで５千万以上の黒字になったので、出資していた分は全部お返しし、なおかつ黒字で残ったので、このような（「Ａ to Ｚ Memorial dog」を）寄付をしたりして、展覧会を閉じた。

これはどうやって実現したかというと、ねぷたの運営組織、青年会議所であるとか、アップルウェーブというコミュニティＦＭがあるが、それのＮＰＯを制作している母体、そこを組織化して、それに誰でも入れる形式の実行委員会を組織し、マネジメントを成功させた。ねぷたを普及させるためのシステムが、奈良さんのところのレンガ倉庫というコンテンツに同期させたような仕組みである。

〔八戸市での事例：八戸ポータルミュージアム　はっち〕

八戸は、同じように三社大祭というようなもので、街の人たちも青森同様に、市民活動をまち中で行う元気なところである。それが自由に使えるような施設計画というものは、これは奈良さんの奈良展を作るのと同じ仕組みを今度、公共施設で導入したものである。

最初は、三社大祭の山車会館と公民館を合わせた施設ということが市の御要望だったが、丁度、新幹線が青森で開業するということもあり、中心市街地が、その当時も八戸市でかなり衰退し、それもターミナルが移ることによって加速してしまうのではないかということで、対策としてこの八戸に山車会館作るというプロジェクトが始まった。

そこで考えたのは、こういうような普通の市民会館みたいなものを作っても中心市街地が活性化しないということ。

従来の施設では、貸会議室になったり、貸スペースになる。利用者の人たちは自分の書道の展覧会をやって、コンサートをやって、借りて、帰るだけと、この往復作業。ここが繋がらない。こういう物というのは、要は従来的なユーザーしか広がらないので、これをクリエイターによって繋げて、いろんなプロジェクト型のものにしよう。まさに、奈良展のようなものを自由にまちの人たちの力でできるような、そういう活用施設を作るという提案をした。

奈良さんの展覧会は、自分たちの趣味の展覧会ではなく、全国、海外からも人が来るような展覧会になったが、要は、自分たちさえよければいい、というものではなくなってしまう。まさに、ねぶたがそうあるように、要は、お客様をもてなすための施設に変化するということ。

このように、従来の公民館のような施設であれば、こういう関係しかないが、大きなプロジェクトをやることによって、いろんな人たちが力を合わせないとできない仕組みを、施設の中でそうせざるを得ない施設を作る

	という計画であった。 　しかも、まちの施設活動以外の人たちとも結びついている。 　行政からお金をいただかなくて、展覧会をやったと言ったが、こういうようなプロジェクトが極まったところで資金調達をやり、それをアピールするためにいろんなノウハウをまちぐるみで形成していくということが起こる。「はっち」はまさにそういうことを奈良さんもいないし、レンガ倉庫もないが、文化施設としてできるということを、論理的に考えた。 **・施設の状況** 　路地でいろんなものを、おばちゃんが物を売っているのが八戸の特徴であるが、これが施設活動の中に入ってくるような計画を立てた。 　三社大祭の山車が入るスペースがあるが、あまり入れておかない。ここは室内広場として使いたいためである。 　いつもは山車がなく、いろんな市場を会館の中、外で普及するようにしている 　また、ＦＭ局（Ｂｅ　ＦＭ）の施設も中に入っている。 　カフェもあり、要は「観光展示だけ」とセパレートせずに、こっちにはギャラリーがあったりして、こっちにはカフェ。全部ハイブリット化した。 　このことにより、活気のある使い方に繋がる。 　まさに、路地でおばあちゃんが物を売っているように、観光施設内でおばあちゃんが別のものを売っているということで、外の元気が施設活動の中に入って来るような活動をしている。 　２０１１年、地震の直前に開業し、回遊率３０％、２３の事業所が１年間で新設するのに寄与した。１３年にグッドデザイン賞、ＪＩＡ優秀建築１００選、これがいわゆる、創造都市の要は成功事例として表彰されている。２０１５年で４００万人の入館者数を達成した。 **〔青森市の航空写真〕** （青森市の）まちの中を見ると半島があって、まるで湖の真ん中にまちがあるようなまち。駅が結節点であり、社会的に見てもまれな景観を作っているまちであるので、「駅＋ねぶた」というような都市性を持っている街の特徴というのを、駅の整備などにうまくリンクさせることによって都市の再生というのはできるのではないかと思っている。

◆意見交換

北原座長	多面的にいろいろなところ、弘前、八戸、最初に青森で今やっていることの説明をいただいた。伊香さんや立木さんのような活動・動きがこのまち中でどんどん広がっていくことが、一つの我々の目標でもあるが、お二

	人の活動報告をお聞かせいただいたうえで、この次に我々が目指すこの駅の周りの利益にしていく活性化の方向について、今日は忌憚の無い御意見、あるいは、お二人に対しての御質問でも、自分たちでは、このようにしたいという意見でもいただきながら進めたい。
西委員	今、伊香さんとか立木さんの方から御説明のあった内容については、非常に面白い取組であり、伊香さんの方は、私も新町商店街の一員であるため、一緒にお手伝いもしながらやっているところである。 ただ、いわゆるイベントというのは、非日常の一過性のもので、ねぶた祭りも夏の１週間だけで、終わってしまうとまた元のまちに戻ってしまうという、それの繰り返しである。そういう意味では、これからやるまちづくりというのは、一過性ではない、持続可能なまちづくりというのをしっかりしていかなくてはいけないと思っている。 そんな中で、今、駅の整備というのが、一体どういう状態となっているのかというのが分からないと、そこにどういう魂を入れるのかという議論が進んでいかないような気がする。 もちろん、理想論を掲げていって、その中で出来ることをやっていくということは、できるかもしれないが、より具体的に話をしていく中では、今、駅がどういう状態になっているのか、実現可能性はどうであるのか、そしてまた、青森市の方では駅から庁舎までを繋ぐ、そしてそこの活性化を図る、ということを言っているわけであるから、それが今どういう状況にあるのか、というところをまず示していただいてからでないと、具体的な話というのは出来ないような気がする。 そんな中で、駅に関しては先ほど御説明があったとおり、立地適正化計画と連携してということで、そのための時間が必要というお話あった。であれば、当然のことながら、庁舎だって大きな都市拠点のひとつであるので、これだって立地適正化計画に適合させなければいけないはず、本来そういうものであるはずだが、そこだけは除外して話が進んでいるという非常に矛盾しているというか、アンバランスなまちづくりが今進められようとしている。 私は、それぞれの御担当の方からはお話を聞く機会があったが、庁舎は庁舎、駅は駅、中心市街地活性化は中心市街地活性化ということで、それぞれ、皆さんはがんばってやっている。ただ、その横の連携が全く無いがために、一緒になってやるという作業が出てこない。 ところが今、駅と庁舎を繋ぐそして、中心市街地活性化を実現させる。まちづくりを行う、ということであれば、当然複数の部門が一緒になって、そこに住む人、そこを使う人、そこで仕事をする人そういう市民が一緒になって話し合いをする。そういう場面が必要ではないかなと感じている。なので、本有識者会議が主催してもいいと思うが、そういう市民も行政も皆を巻き込んだという言い方がよいかは分からないが、皆さんが参加するそういうワークショップなどを開く必要があるのではないかと思ってい

	る。 　　具体的な話はそこからだと思う。
北原座長	これは、部長（都市整備部長）さんの方からお答えいただく
金子部長	貴重な御意見感謝申し上げる。また、立木様、伊香様の積極的な取組といったところのお話をいただき、まさにそういったことだと思う。西様の今お話いただいた、いわゆるイベントは非日常で、実際のまちづくりを考えていく必要があるのではないか。その中で、ワークショップが必要ではないか、というお話であった。まさに本日ワークショップということも踏まえ、少しこういった機会を持たせていただくので、本日いろいろな御意見を伺えればと思っているので、よろしくお願いする。
北原委員	基本的に今の西さんの御意見は、ある種行き先を想像しながらしゃべらなくてはいけないというもどかしさを、何とかできないかというお話。 　ただ、市役所庁舎も立地適正化計画の基本になっているので、立地適正化計画からいえば、今の位置に造ることは、まさしく基本はズッポリはまっているので、その辺りは今日、（東北）地方整備局も来ているので、僕もそのアドバイザーなのでお話しするが、基本的には、ここが中心だと思うところを決めていくのが立地適正化であるから、青森はこの青森駅を中心として、庁舎との間をという話であるから、そのことは基本ラインとして問題ない。 　今、西さんの方から言われた、「この課もがんばっている。」、それを一緒にしていく時期なんだれけど、特にこういう財政面でキツイときだからこそ、そういう連携でつくっていかなければならない。そういう時に、我々が集められた時に、「その行き方がちょっと見えない部分で、議論するわけにはいかないのではないか。」という、立木さんや、伊香さんのような様々な活動みたいなものも、その前がはっきりしているからこそ動けるということ。 　この辺りを今日の会議の趣旨は再度もういっぺん始めようということで、意見を聴くという話であったが、私たちとしては「その方向性でここまでは出来そうだ。」とか、「この辺りはちょっと最初から考えていたほうが良いかもしれない。」というようなラインをまず出していただいたうえで、「じゃあ知恵を集めよう。」という時に、「意見が発揮できるか。」とか、「我々はどんなことをしようか。」みたいなことが言いやすいという御意見。今アイデアというと、なかなか出ないと思うので、その辺りは次回とかまでにある程度（考えておいていただきたい）。 　さっきのお話では「年度内には、ある程度方向性を出さなくてはいけない。」ということであったので、そうしないと私たちも２年前に集められたときにはけっこうバラ色の話もあり、駅がボンと出来て、青森がボンといくみたいな話があったので、現実路線でなお且つ、どこまで本格的にまちづくりという形で駅から庁舎まで繋ぐという形を、「市としてはこの辺りまでは繋ぎたいと思っている。」あるいは、「市庁舎機能についても今造

	っているところと、あるいは、このまちの中にこんなことも繋げると面白いと思っている。」みたいなことを出してこられると、もっともっと前向きな意見が出るのではと。これは、西さんが言った話の一番の趣旨だと思うし、私自身もこれは思うので、次の回のときにはその辺りのある種覚悟を持って、「ここまで行くんだ。」みたいな、あるいは、「ここまでは出来そうだ。」、あるいは、「ここまで行くには皆さんこうしてほしい。」という資料が入ってきた方が、どなたも議論しやすいし、一方、ＪＲさんも話をしやすいと思うが、今のままでは、「協力していただくこととなりました。」みたいな話だけでは、恐らく「詰めた議論にはならない。」というお話だと思う。今回はこういう資料の提示であるので、今の西さんのように次に向けてこういうふうなことを詰めながら、限られた時間であることから、私たちが同じ土俵に入らなければいけないというような御意見を他にいただきたいと思う。
野月委員	会長の代理なので私の発言がそのままデザイン協会の会長の発言と思われても困るかなという危惧があるが、今、西さんの方から「市民の皆さんとワークショップをやりたい」とうお話があった。私は、昔からジオラマみたいなものを作って欲しいと思っている。既にいろいろな意見が出尽くしている。それが総意かどうかは別として、いろいろな団体の皆さんも意見をお出しになっている。立木さんが、最後に見せてくださった青森市の景観。こういったものを大いに活用しながら、全体の「将来はこうなる。」と「青森の駅周辺はこうなる。」というものが、皆同一の目線で同じ価値観として受け入れられるようなジオラマがあればよい。ジオラマはすごくお金がかかる。上海には、すごく大きなジオラマが、体育館くらいの大きさで作ってあり、中国の人たちは皆そこに行くとそれを見て、「あぁ、自分達のまちの将来はこうなるのだ、国の将来はこうなるのだな。」と実感として見ていけるような施設があるが、そういうものを中国は作っているが、私たちもグラフィックデザーナーとかイラストレーターとかそういう建築家とか、様々なジャンルの人間がいるので、そういったものを模造紙ぐらいの大きさのジオラマの代わりになるような、全体として目指すべき姿が目に見えるようなものを作ったら、そこで自分達の役割は何なのか、どう作ればよいのか、幾らかかるのかとか、何が一番優先順位であるかというものを皆さんで集約していくのに大変分かりやすいのではないかなという風にいつも考えている。そういう意見もあるということをお聞きいただければと思う。
北原座長	今の言い方を少し変えると、理想について、イメージについてのワークショップ的な取組というのは様々色々なところでやって来ているのだけれども、それが結局、形として見せられないということがあって、最初、西さんから「ちゃんと状況が分からないことには、そういうワークショップをやりたい。」ということがあったが、今まで出てきたものをある程度「こんな形を」というものを見せながら、次に入っていかないと、これは

	もうずいぶん議論されているし、取組もされているので、その辺りを踏まえたうえでという話だと思う。
石田委員	この委員会に参加してよかったと思うのは、商店街は全国ニュースの時とかに、わざと活性化していないような取り上げ方を青森とかはされていて、自分はそのようなイメージがあったが、伊香さんや西さんのお話とか、商店街の取り組みとかを伺って、それだけでイメージが正直変わった。今日の話を聞いて、本当にワクワクするような。私は普段、土日とかに新町とかをグルグル散歩とかするが、見方が変わってきた。そういうイメージをもっと、特に私は学生と関わることが多いが、学生は正直知らない。そうなると、イメージだけで「商店街は・・・」という話になっていて、もっとこういう活動を知ってもらったり、学生が参加したりとか、いろいろな人が参加すればイメージが変わるのかなという期待度をすごく感じている。
珍田委員	私どもタクシーという業種であるので、直接まちづくりにとか、まちの活動、そういったものでは無く、色々なものが動く、人が動く、それに対して我々が対応するというような立場である。西さんが非常に貴重なことをおっしゃっていたと思うが、３６５日がハレの日では無いわけで、どうやってケの日を盛り上げていくのか。一般市民達がまちの中に行く、そして動き回る。そういう環境がどうやって作り上げられるのか。 昔、青函連絡船があった頃は、青森駅というのがひとつの目的地であったと思う。そしてそこで滞在することによって、「空いた時間で新町へ」というのがあって、色々な形があった。ただ、今そういう形態が変わったことから、駅が目的地で無くなった以上、これからどういうことをメインでやっていくのか、今タイトルとしては「青森駅を中心とした」というようなお話になっているが、それをどこまで拡大解釈すればよいのか、それはちょっと今疑問に思いながら参加させていただいている状況である。 もう少し色々な物が見えてくるようになれば、私も、もう少し積極的な発言ができると思っている。
北原座長	タクシーということで分かりやすく言うと、新青森が出来た時に、タクシーの方でも実験的に青森駅と新青森駅の間、あるいは市役所との間を定額でお金を設定していた。多分「向こうに新幹線の駅を造ろうが中心はこっちだ。」ということをしていくためにそういう取組とかを、バスもそうであるが、公共交通が「中心性を皆に分かってもらおう。」みたいな、取組をやってらっしゃるなという気がした。しばらくして終わったが。
珍田委員	あれはどうしても１年間の期限付きの認可ということだったので、どうしようもなかった。３，０００円以下のコースは、定額運賃というのが認められない原則があるが、あの時は新幹線の開業イベントということで特例として認めていただいた。
北原座長	金額が小さいと、なかなかやらせてもらえないということか。
珍田委員	それと同じことが今函館でも、起きている。

北原座長	あそこはちょっと遠く大変である。
珍田委員	５，０００円くらいかかるのでは。
赤石委員	バスとは直接は関係ないが、私は、郊外のほうに住んでいる。三内地区である。皆さん御存知のように、郊外の方にスーパーがあり、ホームセンターがあり、私の地区にもそういうものがあって、ほとんどそこで間に合ってしまう。完結してしまう。 新町の方に大変申し訳ないが、なかなか足が向かない。商店街には専門的な店が「ここにしかない」ということで、年に何回か、かみさんと一緒に来て回るということである。 今まで私もこの会に出るまでは、あまり新町のことがわからなくて、新聞、特にインターネットをみると、いろんなイベントがある。新町のパンフレットが今日あるが、ＰＲ活動をされているということで、観光客を含め、新町を訪れていると思う。私も実際行かないと話にならないのかということで、１０月と１１月の日曜日ではあるが、朝早い時間、１０時頃に歩いてみた。先ほども話しにあったが、イベントのときには人がいっぱい来る。ただ、時間が早いせいか、駅前から柳町通りまで往復したが、地元の人、それから観光客も含めて、ちょっと人が入っている店が少ないのかと。やはり、継続的に人が集まるような何かが必要かと思う。 それからもう一つ感じたのは、先ほどもあったが、空きビルということで、何店舗か店が閉まっている。看板も出ている。相当前から、大分感じが変わったと思った。空き店舗については、青森市でいろいろな事業をやっていると思う。 今月の初めのほうに、テレビで見たが、北九州のほうで、ビルの空きスペース、広いスペースで起業したい若い人が、自分で払える分の部屋を仕切って、そこで物を作ったり、販売したり。そこで若い人へ起業するための講習会、相談に乗るという取組を併せてやっている。小さいところで成功した人は、空き店舗に行って、成功している。その成功にあわせて、まちに来る人がだんだん増えてきたと。そういうことをテレビでやっていた。 全国の成功事例はあるようだが、青森市でも支援事業ということでやっていると思うが、市の状況もはっきりわからないので、その進捗状況も教えていただければ。 それともう一つ。新町を歩いたときに、大きいデパートの前で、老夫婦の観光客に「市場はどこにありますか。」と聞かれた。アウガと古川市場を案内したが、これもよく考えると、案内不足もあるのかと思う。いろんなパンフレットやインターネットでも調べられるが、観光客に対するわかり易いＰＲを考えていく必要があると思う。
北原座長	バス協会の専務理事に聞いたつもりが、大変貴重な御意見をいただいた。あとで市へ空き店舗とか空きビルの関係を伺う。皆さんご存知のとおり、シャッターが降りたり、東京資本の居酒屋さんが入ったりという状況

	である。 　今御紹介のあった北九州では、リノベーションスクールみたいなのをやって、一番張り切って、そこに市の人もくっついて、そこで新しい人を養成しているみたいなことをやって、国からもちょっと補助が出るみたいである。 　そこで頑張っている人を呼んで、じつは今年の春、八戸で２回ワークショップをやった。みんな来るが、じゃあ使いますかと言うと、「うーん」という話になるあたりがまだ本気じゃないのかと感じる。 　再来週は黒石でそれを呼んできて、一泊二日で参加者みんなでリノベーションセミナーをやる。少しずつ、気運は出ていると思う。なにしろ、空き家再生措置の法律とか様々あって、ただ寝かせておくと税金が取られることとなるから、今しかないと。 　そういうことでアウガ自体の空き店舗の再生みたいなものの計画については、どんなふうに考えているのか。
増田理事	空き店舗の関係のお尋ねについては、実は、青森市で第二期の中心市街地活性化基本計画を作っており、その中で空き地、空き店舗率というのを評価指標として設定している。目標は１３．１％にしているが、昨年１３．３％の率と記憶していた。元々は高い率で、毎年改善傾向になっているが、まだ１３．３％という数字となっている状況である。 　それから、新町にいかに誘導していくという話があったかと思う。これについては、御存知の方もいらっしゃるかもしれないが、中新町のほうへ手前どもで起業サポート相談所というものを設置しており、新たに起業したい方の相談を受け付けて、開業までサポートしていこうということで設置している。 　年間１０件程度の新規の開業に結び付けており、併せて、手前どもで持っている空き店舗の助成があるが、新町の地区を含む中心市街地に出店した場合は、この助成を若干高い率にして中心市街地の方へ誘導したいと考えている。ただ、数字的にはまだ１３％という空き地・空き店舗の率があるので、その解消に向けて取り組んでいかなければならないと認識している。
北原座長	空き地・空き店舗については、経済産業部、いわゆる商工関係の部局でやっているが、さっき、赤石さんに紹介していただいた北九州はと言うと、国交省が一緒にやっていく、つまり、都市整備部が一緒にやっていくと、まさに、西さんがおっしゃったように、連携がないと動かないことがある。共同建替えをするとか、ビルの中を少しイメージチェンジするとか、当然、耐震を考えなければいけない。 　また、商業関係だけではなく、建設部のほうで一緒に考えなければならない。そういったものが、駅を中心としたまちづくりを新しいものにすると思うけれども、古いビルなんかもちゃんとリノベしながら進めていくのも大事であるという。

	新庁舎ができるというだけではなく、その間をどんなリノベーションをして、古いまちと新しくできる駅とを繋げていくかということ、赤石さんのおっしゃっていることは大変ありがたいと思っているし、まさにそれは非常に旬な話題であるが、とても難しい話題なので、横の連携を強くしなければと。あるいはそこに立木さんみたいにパーッと入ってくれるみたいなことをしないといけない訳なので中々大変であるが、そのあたりと古い商店街をどうつないでいくかという話である。
大津委員	建築士会といっても、あまりまちづくりとかには携わっていないので、一市民というような形で。私も、赤石さんのように駅周辺ではなく、市外の筒井のほうに住んでいるので、ほとんど新町商店街のほうに来ないというのが実状である。そして、駅周辺には目が向かない。駅周辺で何が行われているのか、あまり目を向けられないというのが正直な気持ち。 伊香さんとかが一生懸命、新町の活性化にということで、重々知っているが、ただ、市民の人たちが、集められるという何か目玉的なものがあればいいが、目玉は伊香さんたちが一生懸命作っているが、それでも、まだ向けられないというのが現状なのかと感じる。それをどういうふうにしていったらいいのかというのは、今は漠然としている。 １０年以上前になるが、建築士会で「新町通りをいかにして、どうしたらいいんだろうね。」というワークショップを小学生としたことがある。その時は、映画館がほしいとか、ゲームセンターがほしいとか、小学生が考えることですから、そういう他愛もないことを発表していたが、やっぱり、子供たちも大人も集まれるような、今ではなく違うような手法で集めないことには、なかなか新町には目が向かないのかなという気がする。 もう少し時間をかけながら考えていけるようにしたいと思う。
北原座長	違う形で公共交通あるいは自治体の方から御意見いただきたい。
千葉委員	県では、今年度、持続可能な公共交通を作っていこうということで、交通網形成計画というものを作ろうと検討を進めているところであり、また、公共交通機関を利用していただくため、モビリティーマネジメントを推進していきたいということで、赤石さんとも一緒にがんばっているところ。 今回の有識者会議は、「青森駅を中心としたまちづくり有識者会議」ということで、先ほど伺ったところでは、駅から市役所方面エリアを如何に活性化していくか、まちづくりを進めていくかということで、今日は伊香さんと立木さんのお話も聞かせていただき、非常に参考になった。いろいろ一生懸命みなさんやっていらっしゃるということが改めて認識できた。 伊香さんがおっしゃったように、いろんなイベント、春フェスタとか、新町ふれあい広場があるということも伺った。大きなイベントも必要であるが、一過性にならないようにという話が西さんからもあったが、小さくてもいいからいつでもこのエリアのどこかで何かやっている、そういう全体的な仕組みができればいいのかなと思う。ミニコンサートでも、写真展

	でも、商店街の特売でもいいが、そういうものがいつもあれば、人も回遊すると思う。 もう一つ思ったのが、県庁の前（青い森公園前）には、国道４号と７号の石碑があり、ちょっとエリアを離れるかもしれないが、例えば、太宰治の下宿した場所とか、志功の生誕の地とか、いろんなものがあって、過去に青森市でもそういう案内板を作っていた時期があったと思うので、そういうのをどんどんもっと増やし、このエリアにゆかりあるものを発掘していけばいいと思う。 例えば「のっけ丼の発祥の地」でもいいが、そういうものをどんどん作り、あまりお金をかけなくてもできるような仕掛けを少しずつやって、それを「エリア全体にこういうのがあるんですよ。」という看板、エリアを紹介する看板を角々というか、あちこちに複数個所設けて、地道にいろいろ進めていければ、もう少し回遊が進むと思う。 もう一つ言わせていただくと、前回の時も話したが、これからは国内だけではなく、海外からもたくさんのお客様がいらっしゃるので、是非、看板等を作る時は、多言語表記についても御配慮いただきたい。
齋藤委員	今度の３月２６日に新幹線が函館まで延伸が決まっており、それに合わせて、今、青森駅の函館観光キャンペーンというのを今年の４月から９月まで実施した。私どもの会社の特徴としては、首都圏にいろいろ支社があって、そこで、今回のキャンペーンもそうであるが、青森の良さとか、そういうものを宣伝させていただき、誘客を図らせていただいたというところ。 開業後の来年７月から９月までは（青森県・函館）デスティネーションキャンペーンが開催されるので、それに向け、先ほど伊香さんの方から運動の話もあったが、そのような一つ一つの積み重ねが、地元のそういう良さの部分と積重なっていけたら、我々もそういう部分を首都圏で例えば宣伝するとか、誘客を図るとか、そういう大きなきっかけにはなると思うので、来年度のＤＣに向けて実施をしていきたいと思う。 あとは、現地の話であるが、例えば、商店街と駅が一緒になって取組を行うとか、盛岡とかではそういう取組があり、駅周辺を華やかにしていこうという取組もあるので、是非、青森支店も、駅もあることから、そこと少しコミュニケーションをとっていただき、何かできないかという話を、駅と支店には私の方からも話しておくので、そういう動きがあれば新たな展開も出てくるのかなと感じるところがある。よろしくお願いする。
木村委員	いろいろな話を聞いている中で、中心市街地が何かワクワクするようなイメージが持てること、あといろいろな活動の場が繋がっていくことによって人の往来がたくさん出てくると思う。そのためにやっていることが分からないという意見もあったが、やっぱりそれは少しずつ積み重ねていくしかないと思う。 青森の商店街に来ると何かやっているよね、行ってみようか、というの

	があれば、私達交通事業者とすれば、市内の他にも県内いろんな方が青森市に来ていただくことにより、いろんな交通機関を使って回ることもあるだろうし、我々とすれば、フリー切符等も設けているので、新しいアイデア作りにも結びつくと思う。 　あと、我々も青森県さんと共同で「あおてつマルシェ」という企画列車を運行している。列車の中で産直販売しながらのツアーを組んでいるが、基本的に青森発着型の商品・企画が多かったと思う。逆にそれを県内のいろんなところから青森市に来てもらうような仕掛けのツアーというものもアイデアとして出てくるのかなと思うので、そういったことも、我々としてもいろいろアイデアを考えて、お客さんに利用してもらうことをしていかなければならない立場にある。
北原座長	地方の公共交通機関と、そういった街の動きが連携するようなソフトとかが出てきて、弘前の弘南鉄道さんが今やっているのが、大鰐温泉の入浴券を入れた「さっパス」とかである。すごく面白かったのが、青森でもあるバル。弘前でバルをやったときに、西弘商店街でも飲み屋があるのにみんな来てくれないというので、そのバル券を見せると弘南鉄道を往復できるというものにして、向こうに行って帰ってきてもタダとか。 　そういう小さな方からのことが逆に、勝負だと思う。 　そういうことでやっていくと、例えば、ここも浅虫温泉があり、なかなかＪＲと青い森鉄道の乗換えが面倒くさそうという気持ちがあるが、弘前から行くとそういうのがある。ちょっとやりたいことをやってみる。やはり、こういうのが多分市民ワークショップとかで出て来ると思う。そういうのが大事だなという気がする。 　電車の中で美味しいもの食べるのもよい。「出て歩くために」というのもあると思うので、是非よろしくお願いする。 　今日はちょっと外から来ていただいたが、さっき西さんがおっしゃった立地適正化計画、まさにそれを中枢で進めてらっしゃる山田さんが今日は運良く代理で来ていただいたので、少しそういう面で青森市にアドバイスをお願いする。
山田委員	今日の会議に望むにあたり、冒頭お話があったとおり、それぞれの立場でどんなことができるのか、前向きに考えていく時に、国土交通省の立場であれば、制度とか予算とか法律とかそういう話になってしまうが、一回そういうのを頭から置いておいて、本当にまちのにぎわいとかを取り戻していく時に何が必要なのかなということを考えることとする。やはりハード整備のみだけでにぎわいを作っていくことが無理だということはどこでも証明されているようなことと思っており、今日お話をお聞きして、地道な熱意のある取組を継続していくことが必要ではないかということと、地域資源を活かしながら商店街オリジナルの取組を行っていただいたり、立木さんのお話にあった一つの場を時間や複合的に活用することで行うことで新たな価値を生み出すような取組とか、そういったソフト的な取組

	というものを継続的に作っていくことが鍵になってくるのではということも感じた。 　あと、個人的に自分もまちづくりに携わっていて思うことは、まちを好きになるというか、「どうしてこのまちに来たいか。」と思うかというと、「何か思い出を残したい。」「足跡を残したい。」など、「そのまちに貢献したい。」と思わせるようなものが、そこに何度も足を運びたくなり、そこが好きになるということで、そういう場とか空間、時間の作り方みたいなのを目指していくべきであると思う。 　例えば、ある市では城の改修にあたり、出資をすると一口城主になれるという取組をしている。このような仕掛けにより、何かここに来て足跡を残したいという人が多分たくさんいると思うので、そのようなものを活用しながら進めていくことも有効かとも思う。 　そういったことも思いながら、国交省ができることって何だろうと頭を戻した時に、やっぱり支援とか、補助とか予算の話になってしまうのだが、そういったまちづくりの活動、先ほどの話にもリノベーションの取組に関して、国土交通省の補助が始まったと話があったが、そういった民間のまちづくりの促進に向けて、パイロット的や実験的な取組、例えば、空き家とかチャレンジショップなど、そういった活動をしていく、そういったところにも少し支援させていただくような動きが進められているので、そういったものを活用しながら何かできないかなというのを思っている。 　それで、冒頭にもお話あったが、立地適正化計画というのが並行して動いており、私は今の部署で担当しているので、いろんな自治体の計画の動きを見させていただいているが、こういった議論の場でもそうであるが、まず重要なことは、「どこに何ができるのか、この区域じゃダメ、このものじゃなきゃダメ。」とかの観点から議論するのでは無くて、本当にまちとして必要なものとか、こうしたいというビジョン、そういったものが必要で、そういったことに立ち返り、本当に必要なものを吸収できるような環境を作っていただければいいのではというものを聞いてて思った。
北原座長	次回以降さらに技術的な御助言をいただきたい。 　時間が迫ってきたが、私もひとりの委員として、その後伊香さんと立木さんにもプレゼンだけだったので、御意見をいただきたいと思う。 　私が言いたいことは２つ。 　一つは、私は弘前に住んでいる人間として、弘前が一番と言いたい気持ちはあるが、青森に来た時に、コンテンツは本当にいろいろある。埋もれている。というのが一番である。 　ポテンシャルもあるし、コンテンツもあるし、いろんな人達もいるけど、さっき言ったように良くわからないとか、伊香さん達の活動自体を、例えれば、さっき赤石さんや大津さんは知らなかったことがある。 　どうすればいいんだろう、それはそもそもまちを歩いていないからという話が一番大きい訳で、弘前なんかは歩かせるまちにする為に、例えば「テ

	クテク」という雑誌を作って市民達が編集を入れた。うちの学生たちが編集員に入った。 あるいは駅から土手町まで駅土手プロムナードという歩行者専用道路を作ったが、市が警察等々いろんなところと話をして、皆さんご存知のとおり、ああいうところでストリートミュージシャン達が音楽をやろうとすると、必ず届出（道路使用許可）をしなければならない。 それをいちいちやっていたらきりが無い訳で、偶発的な事も起きない。だから一括してこういうことに使えるようにしてくれというお願いをして、あの人達が一回一回届出しないような制度を作った。それでやっと突然ストリートミュージシャンが演奏できるようになった。 そもそもストリートミュージシャンは、どこかからくるから楽しいので、印鑑持って歩いていたら可笑しい。 （ストリートミュージシャンは、）青森の新町商店街でたまに見る。 あの人達と話をして面白かったのが、実は警察の皆さんはストリートミュージシャンを見てニコニコして聞いてくるが、２０分位経つと自分たちに「２０分経ったから隣に移りなさい。」と言ってくれるそうで、場所が変わればいじめられないそうである。 そういうことをしてくれるなら、もうちょっと何かできるのではないのかというのがこれからだと思う。 弘前市の場合はそういう面倒が無いようにしたおかげで、マルシェもやっている。さっきの非日常的な事を日常的な部分でという話しも、この非日常も年１回のペースから月１回、あるいは月２回のペースみたいにして、週１回みたいな事にしていくと、段々段々日常的なことに繋がっていくような、そんな努力も必要なのかなというのが１つ。 ２つ目は、今実は市役所の新しい建替えに絡んだ仕事が全国で動いており、私の研究室だけでも宮古と新潟県の新発田に行っている。 どちらも全く同じ状況である。 宮古市役所は津波で駄目になったので、そこは跡地にして、やむなく駅の裏に造る事になった。ここで言うと駅の西側。そちらに造る事になった。 そのために今やっているワークショップ、新しい市役所と中心商店街と古い市役所をどう繋げるというワークショップに行っている。 その時、私たちが行っているワークショップの手法は、「新しい市役所にあなたの場所を作るとしたら何ができるか。」「古い市役所跡地をどうしたらそこに自分の場所を作れるか。」そしてもう一つ、「その間にもう一つあなたの場所を作ってください。」その映画を作ってもらうワークショップをやっており、そうすると商店街は今まで無いものを含めて考え、歩く。 新発田では、新しい市役所、新しい図書館が、まさにアウガと市役所くらいの距離でできます。両方とも新築である。その新築のときに、間の商店街をどう歩かせるかっていうところのワークショップを今やっている。 どこでも新しい施設ができれば、その吸引力で世の中が活性化するとい

	う話で終わることから、そういうものを機会として、その間をその気にさせるというのが大事である。さっき赤石さんが言っていた、「どれうちのシャッターを上げるか。」みたいな話とか出ないと、よくない。まさに駅を中心としたまちづくりを先ほど部長がおっしゃったように、駅舎から市庁舎までのまちづくりを考えたときに、その間がどう変わっていくかっていうのを指標にしないと、駅に来る人が増えたとか、市役所に新しいものできたとかいう話しではないような気がする。 最後に一つ意見をいうと、今日は総務部長の代理で庁舎建設課の小野課長が来ているが、本来この会議は市庁舎の小野課長は来なきゃいけない会議であると思う。市役所と駅の関係とまちづくりのために、是非次回も総務部長がいらしても出ていただきたいという要望。 伊香さんと立木さんに少し御意見をいただきたい
伊香委員	私の説明の仕方がうまくなかったようで、新町がイベントばかりやっているような印象を与えてしまっただろうか。おそらく皆さん、ふだんは静かな新町ばかりをご覧になっているのでは、と思い、最初に非常ににぎわっているイベント時の新町の姿を写真でお見せした。 しかし、今日私が御説明したかったことは、商店街とは「一過性のイベントで人を集めること。」を目的とする存在ではないということ。またもう一つ、今の商店街に、昔と同じだけ、同じ形のにぎわいを求めるのは、時代背景が変わった今、もはや、少し違うのであるということ。昔は新町しか無かったが、今は現代の生活の中で、様々選択肢が増えているから。 そうした現在において、今こうした街、商店街が必要と思っている方には、きちんと必要で役に立つまちとして成り立っていくための地道な取り組みをしており、今も続けていて、そういう方々にとって楽しく役立ち大事な街として、改めて思っていただき利用していただけている。ただ、どうも情報発信が、うまくないのか、伝わり切らないのか、なので、こうした機会も頂いて伝えさせていただいている。 ちなみに、新町に現在おいでになるお客さまは、バスやタクシーを利用されている方が大変多いということがある。また、百貨店は別だが、昔と違い今の新町の一般商店は、土日ではなく、平日に利用して頂く街になっているので、人通りもそのように動いている。 さて、実際に様々考えていく際に、ワークショップという形について一つ思うことがある。先ほど北原先生が宮古の事をおっしゃった。宮古は復興応援で伺ったことがあるので地理的条件がよくわかるため、さすがな形のワークショップを仕掛けていらっしゃるなと思った。 というのは、ワークショップを行う際に、ただ単に「まちを使うには」みたいなテーマのかたちで設定すると、たとえば、今現在まちを使う必要がなく、使っていらっしゃらない方にとっては「使う必要がないのに無理やりまちを使うとしたら、どうしたらいいだろう。」という後ろ向きな発想からの意見になりがち。そうではなくて、「実際に今、必要としてまち

	を使っている方がいらっしゃるとしたら、それはどうして使われているのだろう。」とか、「まちのどこが大事で使われているんだろう。」とか、またそこからさらに膨らませて「そこが必要、大事なんだったら、もっと使って貰うためにはどうしたらいいだろう。」とか、実際に使われている部分の現実に立った発想で行われるワークショップならいいのに、と思っている。 一つのテーマに対して、立ち位置はそれぞれ全く違う。例えば、新町商店街では、あるお店は県外の方向けのお店。あるお店は地元の生活者向けのお店。そうすると、新町商店街に色を付けましょう、と言った時に、県外の方向けのお店は、青森の昭和っぽさ、レトロさ、田舎臭さ、そういったものを打ち出した街にしたいとおっしゃる。その立場では、それが正解である。県外から来る方は、青森にそういうイメージを求めていらっしゃる。でも、地元の生活者に対しては、新町商店街は、県内で一番先進的な商店街でなくてはいけない。青森の中で、そういう位置を占めるまちでなくてはいけない。 そういうふうに、立ち位置によって全く違った結論が正解になってしまうことがある。なので、何を求めていけばいいのかということについて、一つの正解を、というのは難しいけれど、ある課題について、そこに関する自分の立ち位置は何だろうということをきちんと認識しつつ、それぞれの意見を集約していくことが大事ではないか。 市は提示する問題について、全体に問う立場だが、それだけに、問われる方も自分の立ち位置からだけの発想で考えると、３０万いれば３０万の意見がそれぞれにとっての正解として出てきてしまうのだ、ということを認識しつつ、ある程度の俯瞰力も持って考察すべきではないか。 例えば現在、既に始まっている超高齢社会。認知症のお客様が日々増えており、それに対し、商店街や個店は日々状況を判断し、懐深く、変化しながら対応をしている。「まち」というものを考える際には、「いま自分には必要でないとしても、自分には未知、未経験の立場に置いて、必要なことがあるのではないか。」など、様々想像力をもって考察して行って頂くことが、大変に重要ではないか、と考えている。
立木委員	「青森のまちの魅力とは何か。」ということを考えてみると、やっぱり何で青森駅があそこにあるかと考えれば、青函連絡船であり、やっぱり日本というものが北海道を開拓した時に、あそこにまちがなければいけなかった。そういう必然があって、生まれたまちであるが、その形はやはり日本でも唯一無二の独特の景観を持っている。それが先ほど最後にご覧に入れた、丸い海に本当にまちが海の真ん中にあるというか、その海を取り戻すということが出来るのは、今、ワ・ラッセであるとかA－FACTORYさんであるとか、駅周辺が海を戻すような動きが出来ていて、ラ・ブリッジとか、青い森公園とかいいルートが出来ているので、あそこの魅力をどうやってもっと再生していくのかというのが凄く大きいと思っている。

	それが青森の特徴であり、あんな見事な半島が２つ、まちから丸見えする。あんな素晴らしい景観は他にもないし、それがやっぱりまずもっと触れたいなという、海に触れなくなっているというのが凄く大きい気もするが。それとまちの中に人をにぎわせるというのは、要は活動がある、イベントでもいいが、何かあるから人が来る。それって一億総活躍社会でなはないが、菊池桃子さんがソーシャルインクルージョンじゃないかっておっしゃって有名になったが、要はまち中インクリュージョンというか、何か活動があるから人が来る。 日常というのは、イベントは１日、２日であるが、練習するというのは本当にその１０倍とか、へたすれば３０倍とかずっと練習しているので、そういう活動がまちの中にあるということがやっぱり再生に繋がり元気に繋がって行き、そういうまちの元気に繋がるものを作れる人、ねぶたを作るというのもあり、音楽を作ったり、衣装を作ったり、それをデザインしたり、何か組み立てたりとか、それからお金を持って来る人がいたりとか、宣伝する人がいたりとか、そういういわゆるクリエイティブ産業みたいなものをうまく結び付いて、そういう作業をしているから、まちが元気になっていくというのが創造都市の理屈となる。 なので、そういう要件は、要は「ねぶた」なんか、あれだけの祭りを万博以降作れたまちの人たちというのは、十分ポテンシャルがあるし、要はああいう大きな半島で海の真ん中にしたまちづくりがそのまま出来ていて、しかも巨大なねぶたがまちの中を回遊出来るように、まちの中が劇場みたいになっていて、電線を埋設させ劇場都市になっている。そういうまちは日本でもなく、海外でもないと思うので、そこをうまく繋げていけば、計り知れないポテンシャルが既にいろいろやってらっしゃるので、決してそんな元気なところ、悪いところばっかり見て言えばきりはないが、ますますいろんな事が出来るのかなと私は思っている。
北原委員	今まで新町の話をしていたが、海の話はなかなかすることがなかったので、大きな魅力だということを考えた上で、駅を中心としたまちづくりというのは考えるべきではないかという視点だと思う。 それからもう一つは、「こういう辛い時代だから何とかしなくては。」といったそういう後ろ向きな話ではなく、むしろ、この青森が持っている魅力みたいなものをクリエイティブなものに繋がる魅力をもっともっと引き出すくらいの形でやっていかないともったいないよ。」という御意見だと思うので十分ありがたく、親身に受けて考えていきたいと思う。もう一周して時間がなくなったので、次は最初の西さんがおっしゃってくださった、我々が立つ土俵として、もう少し「ああ、こうなるんだ。」「いや、これしか出来ないんだ。」というふうなことがわかるところに行かないと、「リアルなことは出来ないよ。」という話があったので、是非、事務局でもそのような準備をしていただき、次回もっとみなさんの意見としては、もっと前を向きながらしっかりやっていきたいと、進めていきたいという

	のは自分も一緒であるので御協力願う。 　今日は、創造都市、クリエイティブという言葉が出たが、前の会議でもちょっとお話したが、永六助さんという方が書いた本で、中心市街地は文化を育ててきた。郊外ショッピングセンターは文明に支えられてきた。車がなければ行けない。大型冷蔵庫がなければまとめ買いしない。冷凍食品が出来なければ我々はいけない。まちはそれと関係なくずっと文化を育ててきた。 　僕らは最後まである種の「いや、それはしないよ。」という気持ちでやっている部分が、この青森駅を中心としたまちづくりの委員会に出ている皆さんのある種の気概だと思うので、次回そのようなことも突き詰めていければと思うので、よろしくお願いする。

６．閉会